

痴漢されそうになっている

S級美少女を助けたら

隣の席の幼馴染だった

ケンノジ

Illustration フライ



特別書き下ろし短編 第1話

1 朝が早い幼馴染

玄関前で待っていた伏見と合流して通学路を歩く。

「いつの間にか登下校を一緒にする『幼馴染』になっ
たな」

独り言をこぼすと、伏見ふしみは不思議そうに首をかしげた。

「いつの間にかって、ずっと前から幼馴染だよ？」
そういう意味じゃなくて、と言ったものの、説明して
も骨が折れるだけなので詳しくは言わなかった。

「いつも思ってるけど、伏見、うちに来るの早すぎな

い？」

「えー。そうかな？」

俺基準の時間なら、あと一五分遅くても学校には遅刻しない。

……ギリギリにはなるけど。

「わたし、朝は急ぎたくないの」

「急ぎたくない？」

むしろ、急ぐのが朝って言うてもいいくらいだ。

「うん。余裕を持ってご飯食べたり準備したりしたいの。学校にもちようどじやなくて遅くても一五分前には席に着いておきたい」

「そんなに余裕って大事か？」

俺にはさっぱりわからなかった。

朝教室に着いて思うのは、一時間前に目が覚めたんだなっ
てこと。それを考えるとホームルームがはじまっ
ている状況はちよつと不思議だったりもする。

「電車も、比較的空いてるでしょ？」

「比較的な、比較的」

俺がいつも乗っていた電車の数本前のものに最近伏見
と乗る。

たしかに、すし詰め状態ではあるけどさほどシラくは
ない。

「女子はみんなそうだけと思うけど……」

「あー、痴漢？」

「ち、違うよー！ そ、それもちよっどはあるけど。違
うの」

「違う？」

「そう。ぎゅうぎゅうだと、潰されちゃう。男子にはわ
からないだろうけど」

言われてみれば、何度かそれを見たことがある。人波
に揉まれて流されて姿を消すつてことが。

「子供の頃の賑わうお祭りみたいなものなんだよ……」

「あ……面倒くささがよくわかる」

子供の頃の人込みは、なかなかツライ。見上げれば知
らない人ばかりがいて、周囲の景色も見えないし、どこ
にいるのかもわからなくなる。

「つていうのもあって、朝は早いほうがいいのです」
それには納得だった。

伏見が言うように、乗り込んだ電車は人に押し潰されるようなこともないし、パーソナルスペースを死守できる。

まあ、それもあって、道中登校している生徒もまばらで、あまりいない。

教室に着いても、いるのは数人程度。

「この光景を見ると、早すぎる気がするんだけどな」

「これくらいがちょうどなんだよ」

くすつと伏見が笑う。

「だって、ちゃんと目が覚めた諒くんりょうくんと話せる時間があ

るから」

「ちゃんと？」

「うん。駅までの道は、半分寝ぼけてることが多くて、反応も薄いし相槌も適当だし」

……ちゃんと話を聞いていないのはバレていたらしい。「どこでそうなるかわからないけど、教室に着くまでにはちゃんと目を覚ましてくれるでしょ？」

「話せる時間って……一日中いつでもあると思うけど」俺が言うとうん、うん、と首を振った。

「朝の余裕がある時間におしゃべりしたいの」「俺にはその違いはさっぱりわからないけど、何か違いがあるらしい。」

「今日も授業がんばろうね！」
そう言って伏見は笑った。